

特集
京都
古都の美とまちづくり

Special Features
Kyoto
Beauty and Renovation of the Traditional City

古都のまちづくり史
History of the Traditional City Renovation

都市祭礼と町家・町並み

祇園祭の宵山飾りから考える

増井正哉

MASUI Masaya

奈良女子大学生活環境学部/助教授



1—都市と祭礼を考える視点

京都の7月は祭り月である。そこかしこから祇園囃子が聞こえてきて、何かしら市中は雅やかな雰囲気につつまれる。祇園祭はわが国でも最大の都市祭礼であり、7月1日から31日まで、市内各所でさまざまな神事・行事が行われる。

祭礼には、人それぞれに楽しみ方・見方がある。すこし観察的になるならば、山鉦巡行の華麗な有様に、京

都町衆の美意識、都市京都がもつ伝統の力を感じることができよう。数多くの行事を秩序だてて執行する町々の組織力にも驚く。そして、私たち都市空間を扱う人間の目から見ると、また別の視点がある。つまり、祭礼と都市空間、具体的にいうと町家・町並みとの関わりである。

そもそも都市祭礼は、何もない場所に宗教的なシンボルが置かれて成り立つのではない。舞台となる都市空間に、付加的な装飾が施されて、はじめて具体的な形になるのである。祇園祭の神事自体は鴨川の東に位置する八坂神社で行われ、山鉦巡行はいくつかの大通りが舞台となる。しかし、祭礼の核となる行事が行われるのは、山や鉦を出すそれぞれの「町」(つまり町内)であり、この辺り一帯は通称「山鉦町」と呼ばれる*。ここでは、祇園祭のなかでも、もっとも人手が多く華やかな、山鉦町の宵山飾りを例に、都市祭礼と都市空間の関係について考えてみたい。

よく知られているように、京都の市街地は碁盤の目のように区画された通りによって形づくられている。それぞれの町は、四つ辻と四つ辻の間に、道路を挟んで向かい



写真1—宵山の新町通



写真2—町家のしつらい

あう家並みで構成されており、これを両側町と呼んでいる。宵山の飾りは、この両側町を舞台として行われる。

まず、両側町の骨格をなす通りの中央には、3つの装置が置かれる。すなわち、宗教的なシンボルである山や鉦、町の両端に立てられて町の領域を示す高張提灯、それに露店である。通りの両側に並ぶ伝統的な町家の軒下には、提灯や幔幕・暖簾がかけられる。注連縄をはる家もある。こうした軒下の装飾は、町並みに祭礼時独特の連続感をつくり出している。また、通りに面した室(店の間という)に家宝の屏風を飾る家がある。また、屏風を立て並べて奥座敷まで見通せるように演出する町家もある。こうした飾りを屏風祭という。取り外しのきく格子が埋められていて、通りに対して開放性のある表構え。ウナギの寝床と呼ばれる宅地を活用した奥行きの深い間取り。建具をはずすと続き間として使える室利用の柔軟性。これらは、京町家の重要な特徴である。宵山の屏風祭は、通りへの開放性と奥行きのある室空間の連続性が十分に生かされた飾りであるといえる。

また、山や鉦が立つ脇の建物では、会所飾りと呼ばれる行事がある。これは町会所という町内の共用施設に山鉦に飾り付ける懸装品を展示するものである。会所は町空間のちょうど中央に位置する場合が多く、山や鉦と一体となって祭礼時の町空間の核となっている。

このように両側町の空間構造、洗練された町並み、町家の開放性、柔軟な空間利用の可能性など、さまざまな要素が、祭礼時における独特の演出を可能にし、それが宵山の大きな魅力になっていることがわかる。

2—宵山飾りの変遷

祇園祭は、祇園社と呼ばれた八坂神社の祭りで、古くは祇園会、正しくは祇園御霊会という。御霊会とは、この世に恨みをのこして死んだ人の霊魂をなぐさめる祭りで、平安時代初期にその記録を見ることができる。御霊会は怨霊を慰撫する目的から、当初から歌舞・演劇・相撲などの芸能や、華麗な装いをともなったものであった。そのなかでも、山や鉦の原型が早くから見られる。ただ、都市空間のなかで、どのような飾りがなされていたのかは、よくわからない。他の祭礼の例であるが通りに仮設の棧敷を設けて、



写真3—町家の屏風飾り

祭礼の行列を見物していたことだけは記録にみえる。古代都市・平安京では、両側町や新しい都市住宅である町家はまだ姿を現していなかった。

祇園御霊会のなかで、山鉦が華麗になっていくのは南北朝時代で、貞治3年(1364)の祇園会には「作山風流等これなし。定鉦ばかりなり」(『師守記』)とあって、すでに風流をのせた作り山と御霊鎮めの鉦の2種類があることが記されている。

応仁元年(1467)にはじまった応仁・文明の大乱は、京都の町や寺社を焼き尽くし、祇園会の祭礼も中断を余儀なくされた。文明9年(1477)にようやく乱は収束したものの、御輿を焼失した祇園会の再興は容易でなかった。祇園会が復活するのは明応9年(1500)、じつに33年後のことであった。この時期、都市の住民・町衆たちは町の自治をつよめていったが、祇園会はその団結の象徴となった。天文2年(1533)、日吉山王社の祭礼延引を理由に祇園会が延期された。これに対して町衆の代表は祇園社に祭りの執行を訴えた。「神事これ無くとも、山ホ

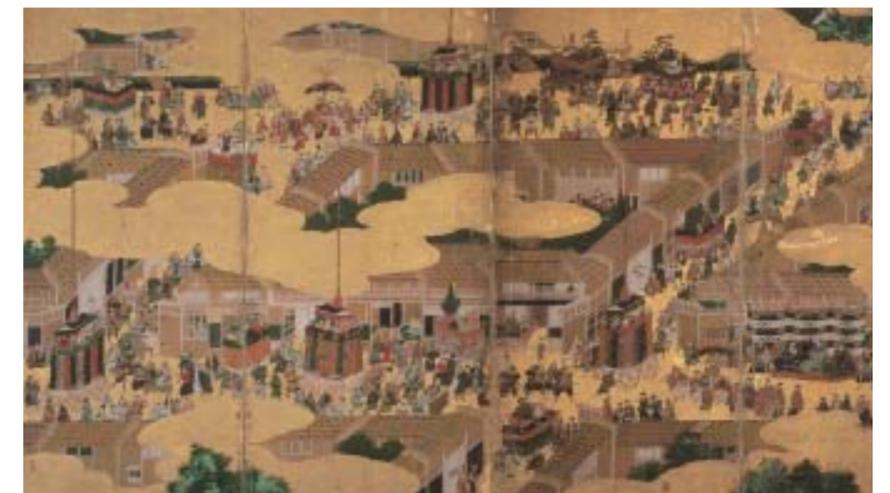


写真4—祇園祭礼図

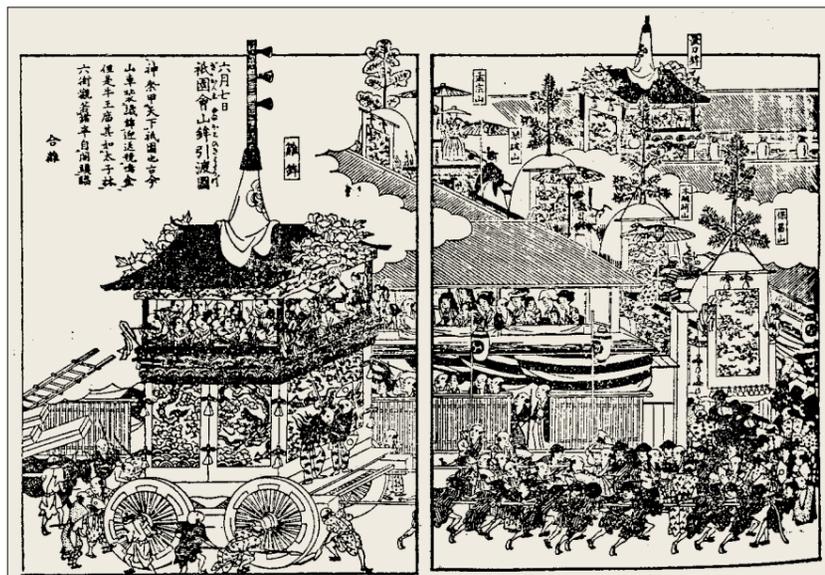


■図1—江戸時代中期の宵山風景 出典：「山鉾由来記」

コ渡し度き」。この訴えは、祇園会に対する町衆の思いを最大限に表すものであろう。

京都における両側町は、史料の上では14世紀にその萌芽がみられ、応仁・文明の乱以降に本格的な両側町の成立が確認できる。通りとその両側に連坦する家々、そして町の境界（四つ辻）に立てられた木戸門をもつ、完結性の高い空間である。両側町が生まれると、そこに共同体が生まれ、町を単位としてコミュニティが育まれるようになる。この時代は、ちょうど山鉾巡行の再興時期にあたり、この行事がコミュニティの結束を強固にし、また対外的には町と町衆の力を示すものとなったのである。

室町時代も下り、戦国時代になると、祭礼と都市空間の関係がより詳しくわかるようになる。この時代の洛中洛外図をみると、両側町の平屋建の家並みのなかに、山や鉾が、そびえるようなスケール感で描かれている。



■図2—山鉾巡行と町家のしつらい 出典：「年中行事大成」

宵山飾りの基本的な空間構造ができあがるのは江戸時代にはいつからである。京町家の意匠が洗練され定型化し、中世に生まれた両側町の空間構造が安定してきた時期でもある。

宵山は本来、選ばれた神役が聖なる神事を勤める厳粛な時であったはずであるが、やがて人に見せることを意識して華やかな装いをこらすようになってきた。宝暦7年(1757)刊の『山鉾由来記』には、くわしい記述が見られる。

「祭礼の町々、前日より提灯を夥敷ともし、幕をうち、金銀屏風、羅紗毛氈のたぐひ、他にをとりと粧ひかざりて客をまふく」、「山の町にハ申ノ刻より人形宝物をかざり、諸人に拝せしむ。貴賤街に群をなせり」とある。

町家の表に幔幕をかけて提灯をかけ、家の中を屏風や絨毯で美しく飾りたてるのは、「屏風祭」にほかならない。また、鉾町では鉾の前後に提灯をつるして祇園囃子をかんで、ご神体の人形と宝物を飾っているが、これは「会所飾り」のことである。

屏風祭と会所飾りという宵山の行事は、江戸時代の中頃には一般的になってきたことがわかる。また、宵山は夜の行事であり、蠟燭や提灯の普及があつてはじめて可能となるが、いくつかの町で、はじめて燭台が寄進されたり、提灯をつったりした記録が見えるのも、江戸時代中期のことである。

江戸時代の町は、町内の成員や不動産の管理を含めた自治機能をもっていた。その基幹的な施設が町会所であり、共有財産の保管や集会に使われていた。京都では、市中のほぼ全域の町内で、それぞれ町会所をもっていた。山鉾町では、とくに祇園祭山鉾の収蔵や会所飾りに使われるようになり、建築形態も収蔵と展示に適したものへと変化していった。

幕末・明治にかけて、元治元年(1864)の禁門の変による火災、明

治元年(1868)の神仏神仏分離など、祇園祭と山鉾町は大きな変化の波に覆われたが、明治の中期には、その賑わいをとりもどす。

明治27年(1893)の『京都祇園会図絵』には「神事の町々に於ては軒毎に神燈を点じ、或いは生花、或いは盆栽を陳列し、以て来賓を響す」「其壯観美麗、実に人目を驚かす。これを観んが為に遠近より来り集るもの、其幾千万なるを知らず。就中山鉾町々の如きは、頗雑踏を極む。実に天下の奇観といふべし」と記されている。町並みは、江戸時代とさほど変わらなかったが、あらたに登場したランプは、山鉾町にも近代化の波が寄せてきたあかしであった。

近代に入つたのもっとも大きな変化は、町会所機能の変化である。町が執り行つてきた近世のような自治機能は失われ、自治拠点としての必要性がなくなり、ほとんどの町で町会所は消えていった。ただ山鉾町では、山鉾の収納や宵山飾りなど、祭礼の機能に特化したかたちで残ることになった。また四つ辻の木戸門も取り払われるが、かつて木戸門のあつた位置に、町の結界をしめす高張提灯が立てられることになった。町会所が祭礼時に機能し、木戸門の位置に境界傍示が立てられることによって、かつての町共同体の空間構造と共同施設が、祭礼時によみがえるのである。

近代に入つたのもっとも大きな変化は、町会所機能の変化である。町が執り行つてきた近世のような自治機能は失われ、自治拠点としての必要性がなくなり、ほとんどの町で町会所は消えていった。ただ山鉾町では、山鉾の収納や宵山飾りなど、祭礼の機能に特化したかたちで残ることになった。また四つ辻の木戸門も取り払われるが、かつて木戸門のあつた位置に、町の結界をしめす高張提灯が立てられることになった。町会所が祭礼時に機能し、木戸門の位置に境界傍示が立てられることによって、かつての町共同体の空間構造と共同施設が、祭礼時によみがえるのである。

3—これからの町づくりと都市祭礼

以上、足ばやではあるが、祇園祭とくに宵山飾りの歴史を都市空間との関係から見てきた。歴史を振り返ってわかることは、宵山飾りが、京都の都市空間の変遷ともに、形づくられきたことである。そして、どの時代においても、通りレベルでも家レベルでも、飾りは都市空間の特徴を最大限に生かしてきた。

そして現代、祇園祭はまた大きな変化の波の中にある。

筆者は、京都市都心部での町づくりにおいて、祭礼時の空間利用と演出を積極的に評価し、配慮すべきであると考えている。宵山飾りに見られる京町家の開放性、軒下の飾りにみる連続性、そして機能特化した共用施設の存在は、これからの都心市街地像を描いていく上で、見過ごすことのできない要素なのである。さらには、祇園祭の空間利用と演出が、都市空間そのものを評価するモノサシとなりうると思えるからなのである。

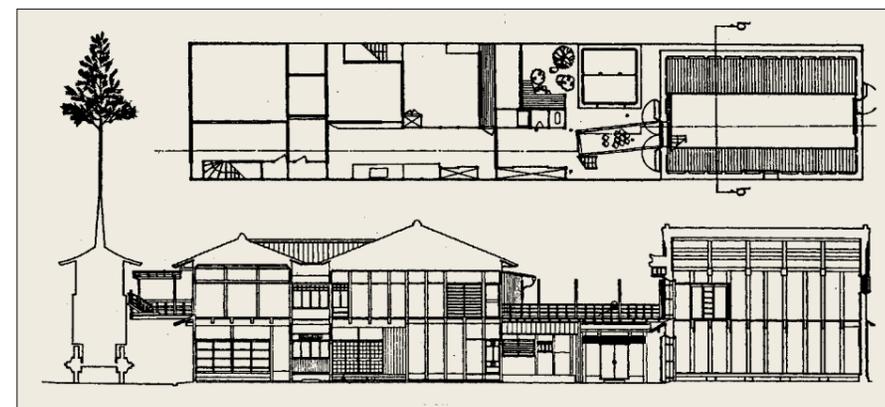
そして現代、祇園祭はまた大きな変化の波の中にある。



■写真5—橋弁慶山町会所のしつらい

京都の都心部では伝統的な町家がつつぎと新しい建物に建て変わっている。新しいビルの建設はひとつの建物の変化を意味するだけではなく、市街地全体に影響を与える。京都1200年の歴史のなかで、現代ほど、一定の様式もなく、ルールもなく、建物の更新が急速に進んだことはなかった。山鉾町も例外ではない。じつさい宵山のそぞろ歩きのなかでも異質の空間に出会い、驚くことも少なくない。巨大な空地、セットバックして立てられた高層マンション等々。京都都心部のに關わる問題がはっきりを姿を現している。都市祭礼と都市空間を切り離して考えることはできず、都市空間の混乱が、かえってシンボリックに表象されているのである。

筆者は、京都市都心部での町づくりにおいて、祭礼時の空間利用と演出を積極的に評価し、配慮すべきであると考えている。宵山飾りに見られる京町家の開放性、軒下の飾りにみる連続性、そして機能特化した共用施設の存在は、これからの都心市街地像を描いていく上で、見過ごすことのできない要素なのである。さらには、祇園祭の空間利用と演出が、都市空間そのものを評価するモノサシとなりうると思えるからなのである。



■図3—六角町町会所1階平面図・断面図 出典：「祇園祭山鉾町会所建築の調査報告-図版編」所収

※ 山町(やまちょう)と鉾町(ほこまち)と呼ぶのが正しい。ここでは通称で書くことにする。この界隈はとくに華やかに飾られる。

(写真提供：京極電撮影 1、2、3、5、大阪歴史博物館 4)